

中海における“アシカ”の捕獲記録と本庄地区の地引網漁について

井上 貴央*・佐藤 仁志**

Record of the capture of a "sea lion" in Lake Nakaumi and the seine fishery in Honjo area.

Takao Inoué * and Hitoshi Sato**

Abstract : In November 1946, a 'sea lion' like animal was caught during a seine fishery on the north coast of Lake Nakaumi, Shimane Prefecture. Based on the interview with the hunter who saw the animal, it was thought that the animal was most likely a Japanese sea lion. Interviews were conducted on the seine fishing at the time, which provided detailed information on the fishery.

Key word : Japanese sea lion, *Zalophus japonicus*, Lake Nakaumi, seine fishery

キーワード : ニホンアシカ, *Zalophus japonicus*, 中海, 地引網漁

1. はじめに

最近, 1946 (昭和 21) 年に島根県中海北岸で行われていた地引網漁において, “アシカ” のような動物が網に入って捕獲されたことがあるとの情報を得た.

ニホンアシカ *Zalophus japonicus* の姿は見られなくなってしまったが, かつては島根半島周囲でも生息していた数々の証拠がある. 古くは, 島根半島中海側の小浜洞穴から縄文時代後期のアシカの骨が見つかったり (竹内ほか, 1982), 出雲国風土記には, 美保関町の沖の御前島や日御碕の鱧島は等々島と記述されており, “トド” (ニホンアシカを指す地方名) が生息していたものと考えられる (瀧音, 2001). 1886 (明治 19) 年には美保関でニホンアシカが捕獲され, 島根県師範学校の教員によって剥製が作製されて現在でも島根大学に保管・展示されている (井上ほか, 1993; 田村・井上, 2023). また 1892 (明治 25) 年の動物学雑誌には「海驢ハ当地の中海及び美保関近海にて時々捕獲せらる」と記されており (渡邊, 1892), 日本海域で生息していたニホンアシカが中海に入ってきていたことがうかがえる.

竹島や隠岐諸島では戦後もニホンアシカの目撃・捕獲記録があり (World Wildlife Fund International, 1979; 井上・佐藤, 1993), 情報の“アシカ”も中海に入ってきたニホンアシカの可能性があるのではないかと考えられた. また, 当時の地引網漁についても詳細な情報が得られたので併せて報告したい.

2. 聞き取り調査と現地の状況

(1) “アシカ”の目撃に関する聞き取り

“アシカ”を目撃したのは松江市本庄町在住の漁師・中島栄氏 (94 歳) で, 現在でも元気で漁を続けている. 2023 年 4 月～11 月に 3 回にわたって聞き取り調査を行うとともに, “アシカ”の捕獲現場を実見した.

目撃したのは 1946 (昭和 21) 年 11 月で, 中海北岸で行われた地引網漁に参加していた. 当時は 16 歳であった.

網を引いたのは, 長海の浜で, 長海川河口南岸の砂利浜である (図 1). 網を引き上げた深夜の 1～2 時頃に胴網^{どうあみ}に“アシカ”が入っているのを見た. 網の中で“アシカ”は死んでいた.

アセチレン灯を点けていたが, 暗闇の中での作業で

* 鳥取大学名誉教授, 〒 683-0032 鳥取県米子市陽田町 24-5

Professor Emeritus at Tottori University, 24-5 Yoden-cho, Yonago, Tottori 683-0032, Japan E-mail: inota52@gmail.com

** 島根大学非常勤講師, 〒 693-0212 島根県出雲市馬木町 141

Part-time Lecturer at Shimane University, 141 Maki-cho, Izumo, Shimane 693-0212, Japan

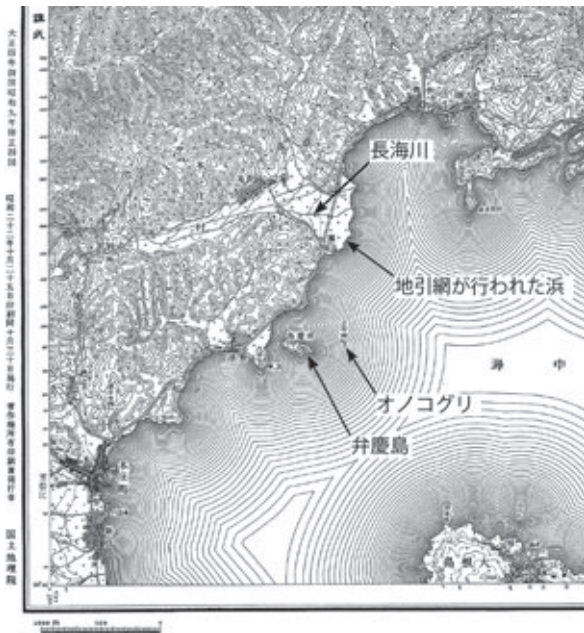


図1 地引網による“アシカ”の捕獲地点と“アシカ”の目撃地点(オノコグリ). 1947(昭和22)年国土地理院発行の2.5万地形図『境』に加筆.

あったため、詳細は分からない。地引網漁に携わっていた漁師が「アシカだ、アシカだ」と言っていた。暗かったので詳細は不明だが、体長は1 m ぐらいで、そんなに大きいという印象はなかった。体色は青みがかった黒色のように見えた。頭の大きさは、大きめの犬ぐらいだった。前鰭と後鰭があったのは覚えているが、耳(耳介)があったかどうかは不明である。年寄り連中が“アシカ”を浜で解体して家に持ち帰ったようだが、年少の自分は分けてもらえなかった。その味がどうだったのかや、解体後の“アシカ”をどうしたのかは聞いていない。

さらに中島氏の母がその父から聞いた話として、明治時代に弁慶島の東側にあるオノコグリという岩礁で複数の“アシカ”が寝ていたことがあったという。この岩礁は1947(昭和22)年発行の国土地理院地図では立花礁となっているが(図1)、中島氏によるとこれは誤りで、立花礁は別のところにある岩礁とのものである。

(2) 地引網漁に関する聞き取り

本庄地区には地引網を引ける浜が3カ所ぐらいあった。明治～大正時代には大灘屋・小灘屋など3軒の網元があったが、大正時代に大灘屋に統合され戦後は会社組織になった。網元が漁の権利を買って地引網漁を実施し、1950(昭和25)年まで行われていた。

地引網は千尋網と呼ばれる大きな網だった。袖網は片側で500尋(750 m)あり、合わせると1000尋あった。網の高さは7尋ぐらいで、端の方は低くなっていた。その上端には桐製の浮子を、下端には陶器製ある

いは地元の瓦屋で焼いて作った“泥いわ”という沈子を付けた。胴網と呼ばれた網袋は、袖網に縫い付けたり外したりして使用し、その網目は親指が入るか入らないかぐらいの大きさで、綿糸で作られていた。

袖網の端には麻ロープがつながり、その先には400 mほどのワイヤーが、さらにその末端には藁を編んだ藁ロープが数100 mほどつながっていた(図2)。

地引網漁には、胴(網袋)を積んだ胴番船が1艘、網を積んだ網船が2艘、藁やワイヤーなどのロープを積んだ網船が2艘、地引網漁で捕獲した魚を運搬する漁船が2艘、合計7艘の船が使われた(図2)。かつて運行していた合同汽船が網を引っ掛けることがあったので、胴番船が見張りの役も果たしていた。

夕方約2 km 沖で胴網と袖網を縫い合わせ、袖網を積んだ2艘が岸に向かって内回し、網を仕掛けた。深夜になって網を引いたが、引き上げには一晩かかることもあり、帰るのは明け方であった。

地引網を引くには、片側で約20人を要した。まず藁ロープを腰引きという道具を使って引き上げ、ワイヤーが出て来るとそれを“カグラサン”(巻き上げ機)に巻いて網を引き上げていった(図2)。“カグラサン”は桎の木でできていて、4本の棒が出ていた。5人が1本の棒を回して、ワイヤーを巻き取っていった。“カグラサン”は地引網の両側の網を巻き上げるために2基あった。それぞれを2台の網船に積んでいて、漁のたびに浜に設置し、漁が終われば網船に積み込んで帰った。“カグラサン”の設置場所は決まっており、相撲の土俵ぐらいの範囲に石を並べて設置場所としていた。長海の浜ではその石がまだ現場に残っている。

地引網でとれた魚は漁船にすべて積んで、本庄にあった網元の大灘屋に持ち帰り、魚種ごとに選別した。魚種は、セイゴ、コノシロ、ボラなどで、当時はサワラ、カタクチイワシがよく入った。サッパはお金にならないので、畑に埋めたりした。捕れた魚はボンボン船で米子に出荷していた。

地引網は網元で保管していたが、漁の後は網掛けに干して帰らなければならなかったので大変だった。また網の保護のために1年に2回ほど大釜で湯を沸かし、カッチという染料で染めていた。クレオソートやコー

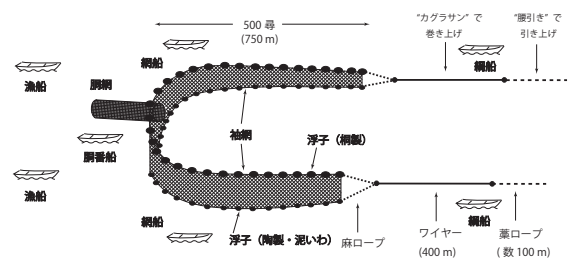


図2 本庄地区で用いられた地引網の模式図(聞き取り情報による)。

ルターも使ったことがあるが、コールターが付着して魚が黒くなったことがあった。

(3) 地引網が行なわれた浜と沈子

かつて地引網漁が行われた長海の浜の航空写真を示す(図3-1)。実際に湖上から現地に向いて浜の様子を確認した。

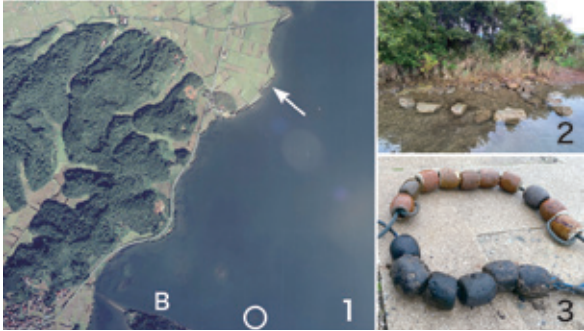


図3 1: アシカが目撃・捕獲された地点の航空写真(1976年9月25日撮影。国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスによる[CCG761 C8-27])。矢印は“アシカ”が捕獲された長海の浜、Bは弁慶島、白丸はオノコグリを示す。
2: 比較的良好に残っていた“カグラサン”の設置場所の石。
3: 沈子に使われた素焼きの“泥いわ”(手前の黒いもの)と陶製のもの(奥の茶色いもの)。

湖岸には石垣の切れ目に長さ約40mの砂利浜が認められた。石垣は江戸時代に水田開発の際に築かれたものとのことである。図1の地図からも読み取れるように、かつては河口付近の平坦地は水田として利用されていたが、現在は耕作放棄されて木や草本が繁茂していた。浜辺にはかつて“カグラサン”を設置した場所に並べられた石が2カ所残っていた。北東の設置場所では10個余りの石が約5mにわたって並べられており当時の様子が比較的良好に残っていたが(図3-2)、そこから南西側に約10m離れたもう一つの設置場所では、数個程度の石が認められたに過ぎなかった。

本庄の波止場などにはかつて使われた沈子が転がっていて、陶器製のものと、土を素焼きした“泥いわ”が認められた(図3-2)。

3. 考 察

竹島はニホンアシカの繁殖地であり、戦後も1975年まで公式な目撃記録が残る(World Wildlife Fund International, 1979)。隠岐諸島でも島前の青風大敷で1951年4月17日に捕獲されたオスのニホンアシカの写真記録が残っている(井上・佐藤, 1993)。現在、山陰の近海では鰯脚類は繁殖・生息していないが、時々、トド、キタオットセイ、アザラシ類が漂着・回遊してくることがある。

目撃された“アシカ”は、前後にはっきりした鰭があったこと、体色が黒かったこと、イヌのような頭をしていたことからアザラシ類は否定できる。トド、キタオットセイ、ニホンアシカのアシカ科動物は5～7月に出産する。目撃された“アシカ”は6月生まれだとすると、捕獲された11月には生後5カ月ぐらいい経過していることになる。“アシカ”の大きさは約1mだったとされるが、トドの出生時の体長はすでに約1mあるのでトドの可能性は考えられない。キタオットセイは冬季に南下回遊してくるが、山陰海岸における漂着・回遊・保護の記録は1～4月が主であり、11月に中海に入ってくることは考え難い。

ニホンアシカの出生時の体長は70～75cm程度である。1886年2月22日に美保関で捕獲された島根大学の剥製は、体長が130cm弱で生後7～9カ月と推定されている(井上ほか, 1993)。目撃された“アシカ”が生後5カ月ぐらいいだとすると、大きさ約1mという聞き取り内容は妥当なものと考えられる。

「明治時代に中海のオノコグリで“アシカ”が複数寝ていた」という言い伝えは、岩礁上のニホンアシカをほうふつさせる。トドやオットセイの複数個体が同時に中海に迷入してくることは考えにくい。前述したように美保関での捕獲例があるので、ニホンアシカが中海に入ってくることは十分考えられ、網にかかった“アシカ”はニホンアシカであると考えてよからう。

本庄の地引網漁に関しては、1883(明治17)年3月～6月に東京上野公園で開催された第1回水産博覧会の出品審査報告(農商務省農務局, 1884)や、島根県の漁業調査(島根県内務部, 1914)および農林省水産局の旧藩時代の漁業制度調査(農林省水産局, 1934)の記録が残る。戦後は島根県教育委員会が1970(昭和45)年に、中海沿岸地区での民俗資料緊急調査を行ったが(勝部, 1971)、本庄の地引網に関する調査内容は希薄である。

今回の聞き取り内容は、戦後まもなく地引網漁に携わり、その終焉を見届けた漁師の証言である。その内容は過去の記録とほぼ一致しているが、若干異なる点があり、最後の地引網漁の記録として貴重なものである。主な相違点の一つは、過去の記録には網にワイヤーの記述がないことである。いつから使われたのかは不明だが、時代とともに切れにくい金属ワイヤーが使われることになったのだろう。もう一つの相違点は今回の聞き取り調査によって、地元で焼かれた素焼きの沈子(“泥いわ”)が使われていたことが判明した点である。

本庄地区の地引網の歴史は古い。『舊藩時代の漁業制度調査資料』では、江戸時代には、25人引きの地引網が2側あり、「毎年藩主地曳網ノ御覧アリ 其捕獲

シタル魚類ハ之ヲ献納シ其報酬トシテ森山村鶯ケ鼻ヨリ大海崎鼻迄ノ沿岸ニ於テ二十五人曳網ヲ専用特権ヲ付与セラル」とある（農林省水産局, 1934）。

松江藩の藩儒を勤めた桃家の初代桃源蔵による『今公年譜巻第二』によれば、1770（明和7）年3月13日には「十三日徒行遊本庄村観引網取魚 進夕膳於村豪木村屋彦吉宅自河津乗船而帰」とあり、徒歩で本庄村に出向いて地引網を見たことが記されている。ちなみに「今公」は松江藩第7代藩主の松平治郷（不味公）のことで、本庄の地引網は少なくとも江戸時代中期から行なわれていたことが明らかになった。

1883（明治17）年に東京上野公園で開催された第1回水産博覧会に、本庄の江角定右衛門と三代賢十は1000分の1の精巧な地引網模型を出品している（農商務省農務局, 1884）。その説明によれば、網の長さは1000尋で幅は最も広いところで12尋、最も狭いところで8尋、袋は長さ13尋、幅13尋で、引縄は左右それぞれ1500尋であった。漁は船7艘（網船2艘、縄船2艘、魚積船2艘、番船）と漁夫25名を要し、漁の所要額は年間に1,000円かかったが、収益は約8,000円に及んだという。

今回の聞き取り調査によれば、網の防腐にはカッチが使われたとのことである。これはマングローブなどの熱帯の樹木から得られるタンニン染料である。それ以前には「のぶノ皮」が使われていたが（鳥根県内務部, 1914）、「のぶ」はノグルミのことである（松村, 1884；沖村, 1988）。鳥取県勤業月報によれば、鳥取県日野郡の山林に自生しているノブノキの根皮を乾燥させたものが、弓ヶ浜の漁村や雲州地方の仲買人を経て送られて漁網の染料に用いられたとされる（農商務省農務局, 1885）。

沈子に用いられた“泥いわ”は、本庄の土を用いて地元の瓦屋で焼いたものであるという。安田（1927）によれば、かつて松江藩主が瓦師を招聘し、当初の築城用の燻瓦を本庄で製造させていた。戦後も引き続き本庄に瓦屋があったとのことであるが、地引網に使われた沈子は地引網漁が行なわれた江戸時代中期から本庄で製造されていた可能性がある。どこでどのような粘土が産出していたのかも興味深い。

このたびの調査は中海の地引網にかかった“アシカ”が目的であったが、本庄で行なわれていた地引網漁についても記録保存の必要性を感じ本稿をしたためた。本庄地区は中海の漁撈活動の中心地の一つであったが、残念ながらその民俗資料は残っていない。本稿では、地引網の染料としてのノグルミや、“泥いわ”の瓦粘土などの自然科学的な側面に触れた。ヒトの生業とも関係する分野であるが、十分な検討はなされていないようで今後の課題として残る。ニホンアシカの

場合もそうだが、できるだけ早くできる限りの情報収集を行って記録保存しておく必要があると思われる。

謝 辞

稿を終わるにあたり、“アシカ”の目撃情報を提供いただいた宍道湖魚類研究会の桑原弘道氏、その目撃や地引網漁などの聞き取り調査などに協力いただいた松江市本庄町の中島栄氏に感謝申し上げる。

引用文献

- 井上貴央・伊藤徹魯・武石全慈・高安克己（1993）鳥根大学所蔵ニホンアシカ剥製標本の記載とその意義。山陰地域研究（自然環境），9，41-60。
- 井上貴央・佐藤仁志（1993）隠岐島三度のアシカ猟。隠岐の文化財，10 隠岐島前・島後教育委員会，74-82。
- 勝部正郊（1971）漁業＜半島部＞。鳥根県教育委員会，出雲中海沿岸地区の民俗 中海沿岸地区民俗資料緊急調査報告鳥根県教育委員会，57-66。
- 松村任三編（1884）日本植物名彙，142。
- 農商務省農務局（1884）水産博覧会第一区第二類出品審査報告，111-112。
- 農商務省農務局（1885）水産博覧会第一区第一類出品審査報告，70-71。
- 農林省水産局編（1934）中海漁制。舊藩時代の漁業制度調査資料第1編，394-398。
- 沖村義人（1988）樹木の鳥根方言，山科・沖村教授定年退官記念事業会，185。
- 鳥根県内務部（1914）鳥根県漁業基本調査報告書 漁業調査（中海及湖川ノ部），26-27。
- 竹内理三・井上辰雄・江坂輝彌・加藤晋平・小林達雄・坂詰秀一・佐原真編（1982）海獣類遺体出土遺跡の分布。日本歴史地図（原始・古代編＜上＞），柏書房，121。
- 瀧音 能之（2001）古代の出雲事典。新人物往来社，46。
- 田村葉子・井上貴央（2023）鳥根大学所蔵ニホンアシカ剥製標本に関する進出史料とその意義。鳥根史学会会報，61，15-26。
- 桃源蔵（不詳）今公年譜巻第二。桃家資料（4），鳥根県立図書館蔵。
- 渡邊盈作（1892）海鱸（*Otaria stelleri*）。動物学雑誌，4（41），113。
- World Wildlife Fund International（1979）World Wildlife Yearbook 1978-79，100。
- 安田要雄（1927）鳥根県の製瓦業。井上要編，日本瓦業総覧日本瓦業総覧刊行会，ちの59-65。